OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>Arnold Friedmann, John F. Pile, Forrest Wilson著　漆原美代子訳「インテリア・アーキテクチュア」
Author(s)	山崎, 慶昭
Citation	デザイン理論. 1976, 15, p. 92-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Arnold Friedmann, John F. Pile, Forrest Wilson著 漆原美代子訳 「インテリア　アーキテクチュア」

"Interior Design" an introduction to architectural interiors

「快適な生活環境を創造したい——という人間の欲望はわれわれの文明の夜明けと共に始まり，常に目前の現実的な課題である」。われわれのようにインテリアデザインを主たる職業とし，創造性を社会機構の中で働かせなければならない者にとって，この本の冒頭の言葉は単なる課題に終らない複雑な意味を含んでいる。なぜならその底に次のような諸問題を抱えているからである。ひとつにはインテリアデザインが浅い歴史的背景から建築との関係を不明瞭にしつづけていることであり，ふたつにこれまで雑学に甘んじざるを得なかった論理的学究基盤があげられる。大学等のデザイン教育の漠然としたカリキュラムにみられるように，自然・人文・社会科学の全域にわたる広大な関係学に眼を奪われて，デザイナー自身自分の行為のよりどころとする論拠を見失ってきたところに問題がある。そして雑役とまで思われる数々の細かい職務内容にとらわれて，意識すらしない社会的職責が3番目にあげられる。4番目には日常の設計行為に数多くの直観的な意志決定があるために，一般性ある説得論理をすぐに下せにくいことである。事実，日常の設計時間の中で直観的な感覚判断とその意志伝達にさくウェートの何と多いことか。さらに5番目の問題としてどうもつかみえない人間の行動がある。我々の生活行動は一般的には共通の基盤，共通の法則に基づいていると判断しえてもその具体的活動の解明はまだ氷山の一角をくずしつつあるといった状態で，安全性，居住性，安楽性など人間の行動と密な性能基準も多面的でいまだ具体的に適用できる内容になりえていない。最後は見捨てがたい社会構造の枠組をどうとらえるのかである。アメリカナイズされた機能的生活空間やイタリアの開放的フォルム空間など視覚にのみ強く飛び込む設計資料の情報過多の中にあって，我々が見落すのは歴史的背景や生活習慣の中に生きづく人間社会の関係枠である。縦型社会といわれる管理機構から生れる各種の格差，それぞれの地域とその伝統にひそむ風俗・習慣，流行となって表われる時代的風潮など，これらの要因が設計プロセスやデザイナーの意思決定に終始なんらかの形で作用している。

以上，これら数ある問題点が複雑さに拍車をかけて各種の決定をいっそうむずかしくしているのも事実である。しかし，このようなことは国の違いを問わずデザイナーを職能とするものには常に課せられた宿命ともいえる問題であり，インテリアデザイナーといえども眼を閉じて通りすぎることはできない。そして，この宿命に積極的に立ち向かう姿勢こそ，Arnold Friedmann の基本的な考えであり，創造的活動をするものは国際的に同一の理念や思想に基づいているとして日本語版への積極的な協力を惜しまなかったゆえんである。我々は時々その悩みの大きさに不安を抱き，我が身にのみ課せられた宿命だと頭をかかえたりひらきなおったりすることがあるが，その時こそインテリアデザインの概念の整理やデザインの中心課題ともいうべき普遍的な目的を把握できていない現実を物語っている。

この“Interior Design”の発刊は生まれてこのかた20才余りになるインテリアデザインが向こうみずな青年期の行動を一応終え，ここで（1970年の建築・デザインの変曲点）初めてその持つ行動と役割の真の姿が何であるかを問いただされようとする時期に時を同じくしている。アメリカのアカデミズムで常に注目されているプラット・インスティテュートのインテリアデザイン科の教官3人がそれぞれの過去のデザイン経験と多くの共同研究・学内討論を参考に，たとえ3つの個性の要約になっても基本的にはひとつの基盤，ひとつの思想で結ばれているとして共同執筆にあたった。Arnold Friedmann は一方で1965年から2年間アメリカのインテリアデザイン教育評議委員会々長をつとめ，John F. Pile は Interiors Second Book of Offices の著者であり，Forrest Wilson は以前P/A誌の編集長を担当してきただけあって参考資料ひとつとりあげてもよく吟味されており，広い視野と深い洞察力が各所に生かされている。これらの社会的活動や教育環境から積みあげられた数多くの資料をベースに，インテリアの基本的な諸側面とそれらが総合的な生活環境とどうかかわっているかを分析し追究したのがこの本の要約といえよう。

インテリアデザインの各側面を詳述するこの本の底に大きく流れているのは「デザインとは何か」「グッドデザインとは一体どういうことなのか」といったデザイナーの求めるべき普遍的な目的についてである。このことは著者たちが冒頭の章“What is the purpose of Design?”に多くのページをさいてまで求めている中心課題であり，重要な問題を含んでいることを知りながらデザインの目的はものを美しくすることであるという説得不足の論法で片づけたり，デザインなんて好みの問題だといって自虐的にデザイン低俗説を唱えてこのことを深く掘り下げない一般デザイナーへの真摯な姿勢となって現われてきている。「デザインとは種々の問題を解決する行為であり，この行為をとり得るものはすべてデザイナーである。」各所に出てくるこの簡単にして明快な言葉の裏にはデザインが姿や形を表

わすのでも特別な人のみが使う言葉でもなく，生活環境における〝もの〟を適正な論理あるプロセスによって具体化へ導く行為を示している。つまり，状況と時間推移に応じて生れてくる諸問題に対して多くの可能性の中から最良の解決を選択することであり，グッドデザインの条件も根底に先ずこのことから始まるといってよい。

さて，我々デザイナーが良いデザインとか優れているデザインという場合グッドデザインを趣味的に判断しようとしているのではないけれども，一般的には好き嫌いの範疇でとられがちである。しかし著者達は好みの問題が入ることによって論理的思考がある壁に突き当り何らしっかりした足跡を生みださないことを指摘して，趣味とデザインの質が混同することを強くいましめている。それ故に起きる著者達のグッドデザインに対するまじめな思考は個人的な趣味の問題を超えてより不変で基本的な何かにかかわる事柄をつかみ出したいとしている。けれども「現代生活の基準はこれだとか，現代的なインテリアデザインはこういうものだと決めつけたり，ほんの限られた幅の仕事だけをとりあげるやり方は狭量で傲慢で独断的な見解ということになってしまうだろう」ということから見られるように，著者たちは数多くのグッドデザインへの問題提起を示しながらも何ら固定化した見解をださず，つまり，一般的手引や言葉上の理念によって簡単に解決の糸口が得られるとは結論づけていない。我々がすぐにでも飛びつきたくなるような一般的手引きではなく，ひとつひとつの前提をあげながらとっかかりのない命題である「グッドデザインとは何か」の大枠を縮めようと努力しているのである。デザイン的評価における最も基本的な前提は我々のつくりだすものの中に我々の思考作用をいかに組み込んで結果を得ているかであり，もののフォルム全体からディテールにわたりデザイナーの理念や考えが効果的な方法で抽象化されていると判定できるものは〝もの〟の中に洗練されたコミュニケーションをともなっているといえる。これは機能的な命題の解決と材料の合目的な使用，加工技術の適切な選択にあわせてグッドデザインの重要な評価基準になってくる。

「この本はインテリアデコレーターのための実用的な技術解説書でなく，デザインの本質を求める人々にある方向を暗示したテキストである。」確かにテキストだとする言葉どうり問題提起ばかりで大枠のみの捉え方に終始した総論的傾向はまぬがれえないし，今後これらの問題を現実の状況の中で我々自身が答えを見つけ出していかなければならないだろう。例えば建築・インテリアを終始芸術作品としてとらえ，我々に審美的判断力を養うように求めながらも，その具体策にもの足りなさを感じるのは否めないし，複雑多岐のインテリアデザインをチームワークでないと処理できないことは理解できるが，現実に多くの頭脳から生れた創造的内容をどのように結果に導くかは今後に残されている。しかし，インテリアデザインが人間環境の質を決める重要な一専門分野であり，視覚的認識以上に日

常の体感によって体得され得る身近かな領域であることを考えあわせるとき，この著書ほどこの分野に全体的視野と論理的思考を求めた研究文献がこれまであまりに少なかったことにいまさらながら驚ろかされるのである。終りにこの中にあるデザインに関する数多くのチェック項目は大変役に立っていることをつけ加えておこう。

㈱日建設計 大阪 インテリア担当　山 崎 慶 昭